

# 白山市文化施設館報

# 白山ミュージアム

<i>CHIDORYONOSATO HAUKU</i>	<i>MATTO HAKUBUTSUKAN</i>	<i>MATTO NAKAGAWA KAZUMASA KINEN BIYUTSURKAN</i>	<i>ISHIKAWA RU-TSU KOURYUKAN</i>	<i>KURETAKE BUNKO</i>	<i>MATTO FURUSATOKAN</i>	<i>TSURUGI HAKUBUTSUKAN</i>	<i>TORIGOE IKKOUIKKI REKISHIKAN</i>
-----------------------------	---------------------------	--	----------------------------------	-----------------------	--------------------------	-----------------------------	-------------------------------------



館外觀(左)と展示室(右)

松任中川一政記念美術館 リニューアルOPEN

JR松任駅南口の階段を降り、蒸気機関車D51を過ぎると、ふるさと橋の向こうに美術館はあります。約2か月の改修工事による臨時休館を経て、2013(平成25)年1月に新装オープンしました。内装と空調機を全面的に一新し、県内外の皆さまをお迎えしています。

2013年は、画家中川一政の生誕120年を迎えます。1893(明治26)年に東京・本郷(文京区)に生まれた中川は、10代では短歌や詩など文芸に親しみ、20代に画家としての歩みを始めます。独学の道は険しいものでしたが、武者小路実篤らを通したゴッホやセザンヌとの邂逅が、中川を勇気づけました。煩悶と模索を繰り返し、一歩一歩を自身で切り開いていった若き中川の足跡を、その作品からたどる展覧会を企画しています。どうぞご期待ください。

平成25年度特別展(予定) 中川一政生誕120年記念展「中川一政芸術の黎明」

平成25年9月14日(土)～11月17日(日)

## contents –

■ 松任中川一政記念美術館	1	■ 石川ルーツ交流館	8
■ 千代女の里俳句館	2・3・4・5	■ 鶴来博物館	9・10・11・12
■ 烏越一向一揆歴史館	6	■ 松任博物館	13
■ 呉竹文庫	7	■ 平成25年度行事予定等	14

7  
No.  
平成25年3月31日

## 千代尼賛「飛州十景図」の画について

### 千尺と千代女

2012年末に、千代女研究を進める上で重要な有名人資料である「飛州十景図 千代尼賛」(以下「飛州十景図」と呼称)を実見する機会に恵まれたので、概要について紹介するとともに、飛州十景図が成立するに至った過程を紹介したいと思います。

宝暦末頃の2月、松任の千代女の元に飛騨高山より一人の青年が訪れます。名を細江三郎衛門幸隆、「千尺」の号を持つ若き俳人は、この時に憧れの千代尼に面会できたことに感激し、以降遠く離れた松任と飛騨との間で千代女との交流が始まります。

千代女は交流を重ねる毎に、一度飛騨まで足を伸ばしてみたいと願っていましたが、この頃既に老齢であつた千代女には飛騨に面会できることに感謝し、以降遠く離れた松任と飛騨との間で千代女との交流が始まります。

### 二木長嘯とそのルーツ

「二木氏十歳童」は、名を二木長嘯(1755-1814)といい、千尺と同じ飛騨高山の人です。画家、漢学者、思想家として多方面に才能を發揮し、特に絵画を能くしました。また心学(江戸時代中後期に行なった教学)に深く傾倒した長嘯は各村々を巡って心学講話を行つて民衆教化に努めた他、考古学にも造詣が深く、彼が収集した資料は考古学史上の貴重な資料として認められ、現在は国重要文化財に指定されています。

二木家は代々造り酒屋を営んでいましたが、元々は加賀国松

駒の地はとても遠く、体力的に無理がありました。一方、そんな千代女の心情を察した千尺は、飛騨の景色を卷物にして千代女に送り、その卷物に賛を依頼します。そして完成したのがこの飛州十景図です。このことは、千代女研究家中本恕堂氏著「加賀の千代全集」所載されている、千尺宛書簡からもその経緯を窺うことができます。意外かも知れませんが、決して多くない現存する千代女作品の中で、書簡等から作品制作の経緯が確認できるものは殆どありません。

明和元年(一説には明和2年)に制作されたこの巻物は、複数の文人の合作になります。最初の前文を千尺と千代女が手がけ、千代女が発句を、最後

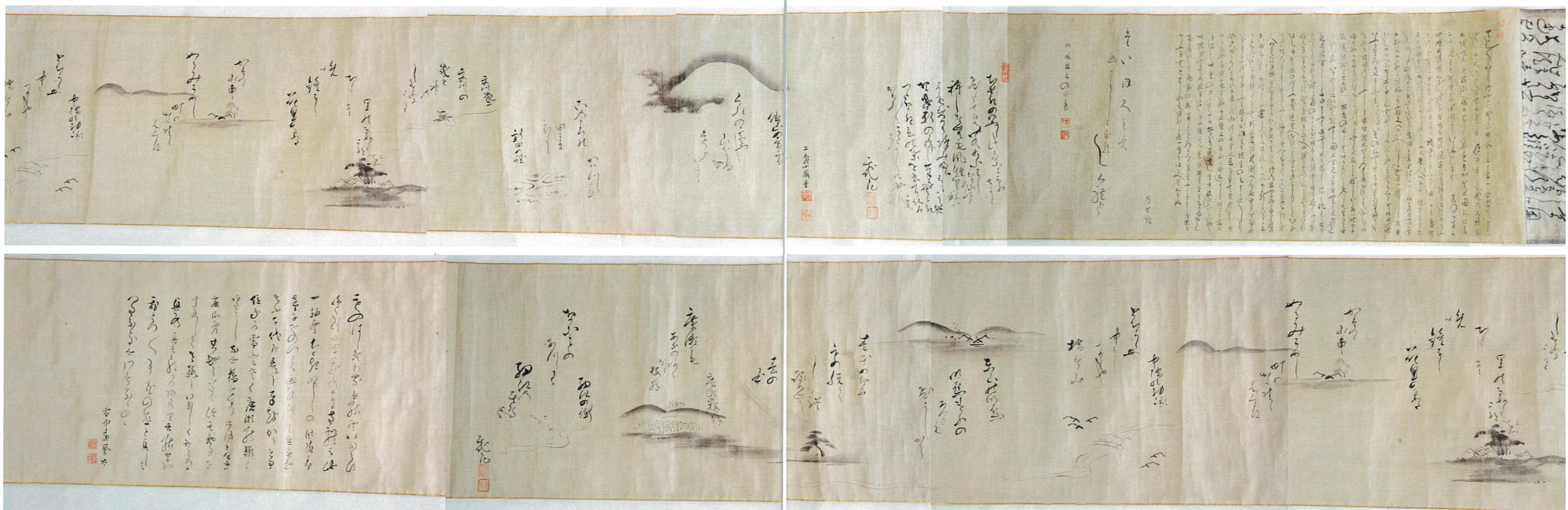
### 飛州十景図

任の出身であり、遅くとも江戸時代の初めには高山に移り住んだものと思われます。そのため二木家の屋号はかつての故郷の地名をとつて「加賀屋」と号し、その家長は代々「長右衛門」を襲名して、現在も高山市にて酒造業を営んでいます。

千尺は飛州十景図を千代女に依頼するにあたり、幼い長嘯の画才だけに目を留めたのではないか、恐らくは二木家のルーツが加賀松任にあることを知つていたのだと思われます。老齢のため飛騨国まで来られない松任の千代女に対し、松任に縁のある「二木の十歳の童」に絵を描かせて送るあたりに、千尺の千代女に対する深い敬愛の念と細やかな心配りが見て取れます。

きっとこの巻物を一目見た千代女の脳裏には飛騨の豊かな景色が浮んだことでしょう。

(下段右に続く)



飛州十景訛文

(千尺前文)

ものははじめあるものはかならず  
ふたつありみつあり、されば此  
一軸はちせきぬしの風流より、  
童子をのづから画をなして佳景  
をそふ、千代尼是に筆を加へ  
て、位山の雪と寒く広瀬の桜と  
あたゝかし、なを橋辺の涼風き  
ぬたの寝ざめ、其地にいたらず  
其声を聞くとそぞろにかなしく  
そぞろに興す、興するのあまり  
言の葉やひとつひとつに、花の  
塵と興してつたなきをわする、

絹本墨画	卷子本(巻物)
縦幅	31・6センチ
横幅	420・2センチ
制作年	明和元年(1764)
前文・千尺	秋(異説有)
跋句・千代女	
墨画・二木長嘯	
跋文・雪中庵寥太	



中本恕堂氏

長年の千代女研究及び郷土の文化振興に尽力された

逝去。 昭和48年3月26日、75歳で受賞しました。

広瀬の桜狩  
なにごとのあつて細江の千鳥哉  
細江の千鳥  
（雪中庵寥太跋文）  
ものははじめあるものはかならず  
ふたつありみつあり、されば此  
一軸はちせきぬしの風流より、  
童子をのづから画をなして佳景  
をそふ、千代尼是に筆を加へ  
て、位山の雪と寒く広瀬の桜と  
あたゝかし、なを橋辺の涼風き  
ぬたの寝ざめ、其地にいたらず  
其声を聞くとそぞろにかなしく  
そぞろに興す、興するのあまり  
言の葉やひとつひとつに、花の  
塵と興してつたなきをわする、  
のみ

※千尺前文のうち赤字の箇所は長嘯について述べている部分。千尺が幼い長嘯の画才について、高く評価していることがわかります。

むかしむかしとかたり伝ふる小野の小町は、やゝ三十一文字のてにをはに雨こひして、秋のみのりを天かに下に輓し、月を晴しては姥捨更科とめを傾けしめ給ひし徳さはななりしとかや。近は加賀の国松任の千代尼こそをむなの身ながらいともかしこく、蕉門の五七五に四時の清韻くさくさを挙、をちこちの風客にみゝをすまさしめ給ふ。その玉声は世の人外の耳目を積むところにして、誰しかも靡きしたはぬはなし。さいつ頃もちさとのそともん韓人へ、ある侯家よりわがくにしきしまの流れのすゑのすゑながら、鳥羽に書玉津さならぬ鳥の跡のつたなきも、五柳のなたやかを好み給ふ程、狂夫へのいへつとともになし給はれかしと、投恵なさしめ給へるほどの事となむ成行ぬれば、今はたみくさなどの口の葉にいふもをろかのことこそ。やつがれもその好む道はひとしき

まゝ、時そとなくけやき調のうかぶにまかせ、鴻鯉のをとづれ屢なりしより、いなしきのふせやがさまもいつとなくうつろひ、むまの尿する枕もとと、いとあはれる旅情を残させ給ひし故翁の寂しごも、此に到つてなつかしくおもひよせ給ひしにや、いささらばいやしきふれる国の雪見にころぶ迄も、広瀬とやらん花の波間にたゆたふて、遊むとのみ浮に漂て既に杖をたにもとり給ひけれど、飛のかよひ路は岩を畳み、梢をたれてみじか夜のふかきなさけもしらず、冬は奴も山又山をそりのはやをにかぢきはくとや、ましておうなの往かふべき道野べならじと、ひたものすがりとゞむるはつ蟬の童に驚きそめて、ふたしへ心となり、今は只思ひ絶なほんとばかりを人つてにいひ越し給ひける。予がほゐなさおもひの種の数ふる物とならば、浜の真砂子にして降来る小雨にさへも心染ずうちなやめる折、かたはらに在りけるなにがしが童、何思ひけむ軒の雨だれを龍淵へ

うけ、ふむでを涵すやいな予に  
一紙をあたふ。みるにおほよそ  
蝸舎の毛十ヶのけしきなど咫尺  
のうちにこめ、ひなびたる山河  
邑里の区なるまで燦然としてめ  
もあやなりけり。実やかの壁上  
の名山に臥せ遊せし例も今爰に  
符合し、此童の歳にはじめて驚  
き感嘆し嗚呼快哉、いでや此地  
をふまで心のころし給ふ雅尼へ  
是を贈り、玉を乞ひ得るならば  
両益にして商家の妙算とそぞろ  
に心うき、負ふた子に浅瀬をな  
らふなんめりと、画毫をやとひ  
一句を吐そへをくりぬ。

（長嘯画千代尼贊）

位山の暮雪

くれの雪や山ちかふ城遠ふなり  
新田の蛙

このころの田にもこぼるゝかはづ  
かな

宮川筏士

宮川の筏も神のしげりより

花里のきぬた

晚鐘にちらした里のきぬたかな

ちせき

かたのの水車

二木氏十歳童

ないほくも吹画にみするしぐれ哉  
明和改元の小春

(千代女前文)  
ちせきの御ぬし此景にものせよ  
と、ひたせめ聞へ給ふに、なに  
くれと辞しなむも風雅ならね  
ば、よもすがら降みふらずみさ  
だめなき軒の雲に筆をそゝぎ、  
つたなき言の葉を書つけ侍るも、  
おそれおそれまたはづかしけれ。

ぬるみはやし町のかた野の水くるま  
中橋の納涼

どちらも中につだうや橋すゞみ

東山の明鳥

明鳥けふのあつきもひがしから

松本の時雨

もの脱でしぐれ詠めむ松の本

千代女研究家 中本 恕堂

中本恕堂は（1899-1973）は現在の白山市東一番町に生まれました。恕堂は号で本名は「二三」。別号四萬窓。  
大正8年に石川師範学校本科を卒業、教職に就きながら、『松任町史』の編纂など松任の郷土史研究と文芸の普及、千代女研究に生涯を捧げました。大正13年には無人街頭社を結成して文芸誌『無人街頭』を発行。また「北聲会」にも入会し、創作活動に励む一方で室生犀星や小松砂丘らの文人と深交を結びました。昭和8年には自らが主宰となる俳句結社「白山吟社」を設立して、俳誌『白山』を発行。『白山』には著名俳人からの寄稿もあり、全国より注目を集めました。

また、20歳の頃から千代女研究を進め、昭和6年の『千代尼聚考』にはじまり『千代尼の一生』『加賀の千代』を相次いで出版し、昭和30年には大著『加賀の千代全集』を上梓、以後『加賀の千代真蹟集』『加賀の千代研究』の千代女三部作を完成して、千代女の実像解明に尽力しました。

A black and white portrait of Nakamoto Sotan, a man with dark hair and a mustache, wearing a dark suit jacket over a light-colored shirt.

中本恕堂氏

土の文化振興に尽力された功績により、昭和32年に第一回の松任町顕彰者表彰、次いで昭和47年に北國文化賞を受賞しました。

逝去。

昭和48年3月26日、75歳で

## 加賀の傑僧 任誓

貞亨・元禄の頃(1684)、  
曲村(現、石川県白山市出合町)  
に俗名を「与三郎」、名を「任誓」  
という一向宗禪門があり、一郷  
はおろか一郡挙つて慈父の如  
く、尊信された人がいました。

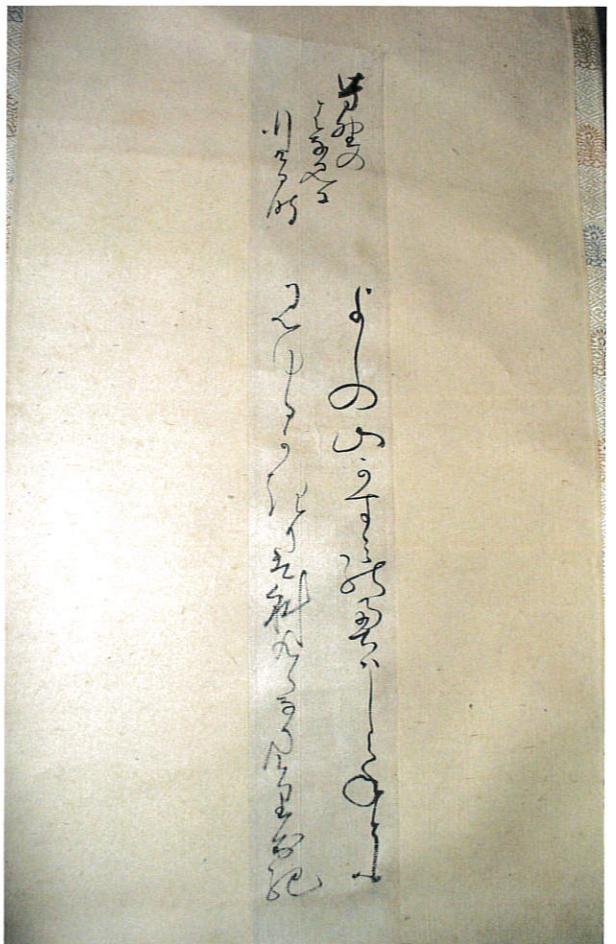


任誓像

任誓は万治元年（1658）頃の生まれで、母親は二曲村居住の十村の娘であるものの、父親は不明であつたと言われています。

呉竹文庫はその建物の構造上「お茶会」での利用が多い施設ですが、係では俳句や川柳、短歌、生花、着付け教室などでの利用も受け付けています。

その時、床の間に掛けられる軸は呉竹文庫が所蔵するものが大半ですが、その一つに、今回紹介する「吉野山での花見」を詠んだものがあります。



呉竹文庫の逸品

明治維新の後は、宮中御歌所所長となり、宮中に二条派の流麗な歌風を広めました。高崎正風ら門人も多く、そ七十四歳で惜しまれながら、その生涯を閉じました。

呉竹文庫創設者の熊田源太郎は、和歌などの国文学が好みで、日本独自の優雅な自然をありのままに表現したこの軸は共箱も備わり、軸装も傷みが殆どなく、とても大切にされていたと思われます。

しかし、これを郡内寺々の僧侶達が妬んで、任誓の説くところ邪法なりと、本山の本願寺に訴えました。

シコトヲ、ココロノユクママニ、  
イヒアヒタリ」と「任誓御講帳」  
に書かれています。

こうして段々と同心円的に説  
法を広げ、それを聴くため百姓  
が大勢集まるようになります。  
た。

して本願寺の下僕となり、本格的な修行を積み、諸事にわたり学問を修めました。

と仰せられて「宗意に違ひないな  
ことを門徒に知らせよ」と御書  
を下されました。

召捕られ、身柄を能瀬村（現、石川県津幡町）に留置されました。その後、任誓は許されることなく、享保9年（1724）



出合地区にある任誓の碑

(文責  
安本)

## 収蔵品展(石川ルーツ交流館)

今秋の9月から10月にかけて、石川ルーツ交流館では表題の企画展を予定しています。

今回は、屏風、衝立を中心掛け軸も含め総数約二十点の見ごたえのある品々が並ぶ計画です。

内容は、美川に所縁のある作家のものばかりですが、玄人筋の眼効きを喰らせる作品も展示する予定です。

出品の主な作家を見ていくと、絵画の呂井渙雲（むらひいいうん）、笠間竹雪（かさまちくせつ）、米田柳莊（よねだりゆうそう）、漢詩の山田新川（やまだしんせん）など、いにしえの美川の興隆を知る方々には懐かしい名前が目白押しです。

この中でも、呂井渙雲の夫婦鶴の屏風は彼の作品の中でも大作で、正月やおめでたい席に飾られたと思われ、細かい線で力強くかつ鮮やかに描かれており、どこに出しても見劣りのしません。

石川ルーツ交流館開館間もないころに一度展示されました。が、約十年ぶりにお披露目されます。

完成度を誇っています。

石川ルーツ交流館開館間もないところに一度展示されました。が、約十年ぶりにお披露目されます。

完成度を誇っています。



(文責 伊藤)

大正6年に美川北町の徳証寺で一世一代の画会が催され、木村杏園、岡白嶺、広谷水石らが訪れ盛会であったといいます。昭和34年に七十五歳の生涯を終えました。

## 特別展「つるぎの昭和」フロアートーク 語り部 上田 輝一 氏

### 『修理して使う昭和』



私は靴屋をしています。親父も靴職人でした。鶴来の町は商人もいますが、特に職人が多い町でした。箪笥、刀物、酒、醤油等多くの品物が鶴来で作られていました。

職人が物を作る時には、修理して使う事を大前提としています。修理して使つて欲しいという思いで作つているのです。しかし、昭和40年代から「傷んだら捨てればよい。」という使い捨ての時代になつていきます。

現在、物置にもつたいたくて捨てられない物が一杯ある人も多いのではないでしようか。何故捨てられないのかというと、修理すれば使えると思うからです。残念ながら、今の靴の材料にはボール紙が使われています。使い捨ての物として安く作られているのです。自動車は当然修理して使います。家でも何でも修理して使うのが当たり前です。先日、電気製品が壊れたのですが、「十年前の物は部品が無いので直せない。」と言われ、捨てるしかありませんでした。だから、世の中はゴミで一杯になつてしまふのです。私の作る靴は捨てる土に戻ります。今の靴はビニールやプラスチックを使っており、捨てても土に戻りません。現在は中国等から使い捨ての品物が洪水のように入つて来ます。



昔の容器は木や焼き物が多く、木は土に還り、焼き物は繰り返し使われていました。



醤油の容器

丈夫な物であれば長く使えますが、壊れても安ければ良い、という社会になつてしまつています。傷んだら捨てるといふ考え方が当たり前になると、親子の間でも「傷んだら捨てれば良い。」となつてしまい、これは大変な事です。壊れるとぐ捨ててしまい、新しい物に取り換える事を繰り返して良いのかと、少し後ろめたい気持ちになります。

修理して使う事の大前提としているのです。修理して使つて欲しいといふ思いで作つているのです。しかし、昭和40年代から「傷んだら捨てればよい。」という使い捨ての時代になつていきます。

溪雲は明治16年、初代美川町長の長男として生まれました。生来、絵を描くことが好きで、正月やおめでたい席に飾られたと思われ、細かい線で力強くかつ鮮やかに描かれており、どこに出しても見劣りのしません。

溪雲は明治16年、初代美川町長の長男として生まれました。生来、絵を描くことが好きで、正月やおめでたい席に飾られたと思われ、細かい線で力強くかつ鮮やかに描かれており、どこに出しても見劣りのしません。

溪雲は明治16年、初代美川町長の長男として生まれました。生来、絵を描くことが好きで、正月やおめでたい席に飾られたと思われ、細かい線で力強くかつ鮮やかに描かれており、どこに出しても見劣りのしません。

溪雲は明治16年、初代美川町長の長男として生まれました。生来、絵を描くことが好きで、正月やおめでたい席に飾られたと思われ、細かい線で力強くかつ鮮やかに描かれており、どこに出しても見劣りのしません。

略化され、ボンドで接着するため、骨一本だけ替える事ができないのです。骨をほぞで「キュツ、キュツ」と音がするまで固く組み合わせて作った障子は、ボンドが無いため外すことができるので。逆にボンドで接着した物は、時間が経つと自然に外れてくるのです。修理したいと思っているのに修理できないので、捨てなければならぬのです。

新品の靴が傷んだらこれを捨て、新しい靴に替えればいいと言う人がいます。その人達は自分に合つたちようど良い靴を履いた事がないんだろうと思いません。靴という物は、使う事によつて自分の足に馴染んできます。今の靴は馴染んだ頃に傷んできます。傷んだ所を修理すれば、いつも履きやすい靴、足になればいいです。

ブリキ屋さんの話では、鍋なべとか釜とかを修理する「鑄掛け」と言う技術があつたといいます。鍋に穴が空いた時は、松ヤ

年程前に親父が作つた靴を直しに来たお客さんがいた事です。最初その靴を見た時は、どこかで見た事があるが私の作った靴ではないと思つていました。靴職人は、かがとに自分の名前を入れる事になっています。私の作った靴にも上田輝一、何年製と書いてあります。ところが、その靴のかがと見ると、親父の名前があつたのです。私ももう五十年近く靴屋をしていますが、親父の作った靴を修理するなんて、大変感激しました。私は以前、靴について親父から話を聞いた事があります。「靴を一足作つたら、四十年修理して使う事が出来る。そんな靴を作つたものだ。」今は四十年では飽きがきて、そういう物を使つている人は少なくなっています。今は、安いのが当たり前、使い捨てなんだから。私はその辺にちよつと疑問を感じています。少しは修理する事を見直してほしいと思います。

鶴来は扇状地の要で山麓の物資・海の物資が集まり、昭和初期には既に一六市<sup>いちろくいち</sup>と言う露店の市場が盛況で、吉野谷や尾口から男は炭を七俵、女は五俵担いで鶴来に売りに来ていました。その炭を売つて海産物や野菜を買うのです。鶴来は昔から物もお金も文化も集まる所なのです。

「物資供給の貧しい時代」



二を溶かし接着材として穴埋めに使つていました。「食べ物を煮る時に、松ヤニが溶け出るんじゃないか。」と聞いたところ、「大丈夫や。薬局の薬でさえ、松ヤニで固めている。」と言われました。そう言えば私も靴を縫う時に糸に松ヤニを付けて接着の役目をしています。糸が切れてもバラバラにならないのは、松ヤニのおかげです。今の靴はミシンで簡単に縫つてあるので、糸が切れたら直ぐバラバラになります。

A black and white photograph capturing a bustling winter scene at a frozen lake. The foreground is filled with numerous people of all ages ice skating. Some individuals are in pairs, while others are part of larger groups. In the middle ground, a few people are seen playing a game on the ice, possibly curling or shinny. The background features a dense line of snow-laden evergreen trees, with rolling hills covered in snow extending into the distance. A small, simple wooden cabin or outhouse sits on the right bank of the lake. The overall atmosphere is one of a lively, community-oriented winter gathering.

小原スキー場

や鶴来谷（白山麓）では静岡のお茶ではなく、小原のお茶を飲んでいました。さらに魚屋では、昆布とかニシンなどを荒縄で縛つて乾燥させる加工もしていました。北海道の羅臼の昆布やニシンを、鶴来の商人が現地で買い上げ、その値段は、鶴来の商人により決められていました。それだけ鶴来の商人には力があったのです。私の先代は松任の出身ですが、鶴来の方が景気が良く、鶴来に出て商売をしたといいます。

は、昆布とかニシンなどを荒縄で縛つて乾燥させる加工もしていました。北海道の羅臼の昆布やニシンを、鶴来の商人が現地で買い上げ、その値段は、鶴来の商人により決められていました。それだけ鶴来の商人には力があつたのです。私の先代は松任の出身ですが、鶴来の方が景気が良く、鶴来に出て商売をしたといいます。

靴を履いた人が多かったようですね。軍隊は二、三年勤めれば帰れるので、帰つて来た人達は、革靴が非常に履き易かつたため、それを作つて欲しいと言う人がいました。しかし、牛革がないので、豚革で作つています。本当に物の無い苦しい時代であり、そんな頃に私が生まれるのです。

昭和16年には大東亜戦争（太平洋戦争）が始まります。生活が苦しいため、山麓から山菜、くるみ、銀杏ぎんなんが鶴来にどんどんと入つて来ます。鶴来では手取川のゴリを沢山捕つて来て、焼いて柱につり下げてある家が多くみられ、それを素麵そうめんの出汁等に使つていました。

そしてついに、米も魚も配給の時代になります。展示ケースに展示してある木箱は、魚配給用の箱です。これを持つていかない魚が買えないのです。箱には七と書いてあり、上田家の家族は七人なので、魚は七人分しか買えないのです。いくらお金を持つても売つてもらえ

村の建具屋さん等三軒のスキーリング製作所がありました。材料は桜の木、安い物はブナの木です。親父は革製品を取り扱っていた関係で、靴とか留め具のベルト、中国産の竹を使つたストックの持ち手の皮紐と先のリング部分を作つていました。昔のスキー板の裏にはアザラシの皮が貼つてあります。それは坂から降りる時は毛が寝て前へ滑り、坂を上る時は毛が逆立ち、ストップバーとなつて登りやすいのです。しかし、昭和九年の手取川大水害で白峰に置いてあつたブナの木、桜の木が全部流されてしまつた事と、二年間雪が降らなかつた事から、鶴来スキーの製作は終わつてしまします。展示ケースにストックが展示してありますが、それは私の親父の作った物で、上田と焼印を押してあります。本当は買つた人が自分の名前を書くものですが、親父は何を思つたのか上田と書いています。



## 火鉢体験の様子

日（火）まで、企画展「かわつてきた人々の暮らし—古い道具と昔の暮らしー」を開催いたしました。

小学校3年生対象の社会科学習に役立ててもらうため、むかし使われていた道具を展示したものです。できるだけ学校現場の要望を取り入れ、学校内では

# 博学連携事業「かわってきた人々のくらし」 —古い道具と昔のくらし—

すから、皆でくじ引きをし、くじに当たった人だけが配給券を持つて物が買えるのです。下駄は鶴来で作っていましたが、それでも配給なのです。私が学校の時に戦争が終わり、木工所に下駄が山程あるので、先生に連れられて鼻緒はなおのない下駄を一足ずつもらつた思い出があります。山程あるのになぜ皆に配らなかつたか、疑問に感じました。また、塩が無くなつてくると、子供の遠足で加賀舞子の海へ一升瓶を持って行き、塩水を入れて帰つて来た事もありました。一升瓶で二本が限界でした。また、美川や金石から塩水を売りにも来ていました。鶴来の魚屋組合では、加賀舞子の海で大きな鍋に塩水を入れ、火を焚いて塩を作り、皆に配つていました。幸いその当時、能美線の電車が

ないのです。昭和20年は親父が中本町（現鶴来本町二丁目）の町会長をしており、中本町は四十三軒に二百九人が住んでい

あつたので、電車で毎日通つて  
いたのです。

そんな物の無い時代に、鶴来  
町が海軍へゼロ戦という戦闘機  
を寄付した事があります。日本  
にお金がないため、国は市町村  
に寄付を依頼し、鶴来町が寄付  
したのです。その時の総理大臣  
は東条英機で、その兄弟が鶴来  
町に住んでおり、寄付の話が進  
んだのではないかと思つていま  
す。また、生活が苦しい時代で  
あつたにもかかわらず、鶴来に  
は有名な人物が来ています。絵  
描きの前田青邨・北澤楽天、文  
学者の巖谷小波、詩人の河東碧  
梧桐、東本願寺大谷派の闡如上  
人です。

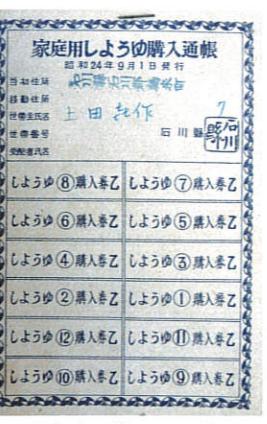


昭和17年に鶴来町が海軍へ  
寄付したゼロ戦「加賀鶴来町民号」

余談になりますが、鶴来の町民は祭が大好きです。ところが、刀を持った造り物の武将はアメリカ人にはすごく怖い存在だったようです。戦後の昭和21年に、進駐軍というアメリカ軍が金沢に事務所を置きます。鶴来の酒、鮎あゆ、ゴリがおいしいという事で、アメリカ兵達は、鶴来にお酒をよく飲みに来ていました。また、祭も面白いので祭にも來るのですが、「ライオンダンス」と呼ばれた獅子舞や棒振り、刀を持つ武将の造り物が怖いという事で、当時アメリカで人気のあつたポパイの造り物を、アメリカ兵のためにわざわざ造ったそうです。

山が好きだったので、鶴来の山好きの人を集め、金沢の医王山での登山競技に石川県選手団として参加しました。当時は米を持ち込まないと宿泊できなかつたため、県外選手団は軍足（靴下）に米を入れて石川に来ていました。軍足に米をいっぱい詰めると片方で五合、一足で一升運べます。しかし、四国や九州の選手団は米を持っていない人が多く、鶴来では競技こそ無かつたものの、そのような選手団の世話をしました。

このように、戦争が終わっても昭和24、25年頃までは物が無く、配給が続く貧しい時代でした。



(文責  
木田)

1 「あかり」のつけ方  
2 部屋を照らす「あかり」  
3 移動に使う「あかり」

(3) 「料理する」  
(4) 「すずしくする」  
(5) 「あたたかくする」  
(6) 「音をきく」  
(7) 「その他」

「その他」の部分では、①氷  
冷蔵庫②そろばん④手回し計算  
機③箱膳を配置しました。

また、むかしの生活空間の雰  
囲気を感じてもらうため、写真  
パネルで、「昭和30年代の居間」  
(小松市立博物館「しらべてみよ

うむかしのくらし」展示風景)、白山ろく民俗資料館の「杉原家の囲炉裏」を展示了。

業での見学には、常設も含め地域の特質もある、むかしの農家の暮らしも学習できるように構成しました。



## ミニ展示「ほっこり昔のくらし」展示風景

学校からの見学希望期間が1月下旬に集中し、日程調整に支障がでたこともあり、周知方法や日程調整など来年度以降の課題ですが、小学校10校765人の見学があり、成功裏に終えることができました。

期間が3週間余りと短かつたこともあり、企画展の一部を口ビーに移し、ミニ展示「ほっこり 昔のくらし」として3月31

# 平成25年度展示・行事予定

事業計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
千代女の里 俳句館	中本恕堂展 俳画の偷しみ展 立夏展示替	野の道植物画展 小川修俳画展 写真と俳句展	OP講演 立秋展示替	西のぼる俳画展 ギャラリートーク ギャラリートーク			俳句協会会員展 立冬展示替		立春展示替 ふるさと交流展 新春展示替			
白山市立 博物館 (旧松任博物館)	企画展 「桜伝説」展		企画展 「小川直子」展		企画展 「白山市の 獅子舞」展		企画展 「手取川七ヶ用水」展		企画展 「かわってきた 人々のくらし」		企画展 「昭和の写真」展	
松任中川一政 記念美術館	春季テーマ展 「中川一政 薔薇への情熱 －自作額を中心に」	夏季テーマ展 「福浦そして駒ヶ岳－対象への飽くなき挑戦」	夏休み親子ワークショップ 第19回 花を描こう絵画展	生誕120周年記念展「中川一政芸術の黎明」	冬季テーマ展「花のいのちを描く－椿と岩彩を中心」							
石川ルーツ 交流館	箇笛 コンサート	洋画展 (開催時期 未定)	民謡を 楽しむ会	自然教室 絵画教室 (小学生対象)	企画展(館収蔵品展)	ヨシ笛コンサート 二胡コンサート				「ひな人形展」 と 「昭和の生活用具展」		
呉竹文庫	春季企画展 (二十一代集展)	オカリナ コンサート	夏季展(内容未定)						秋・冬季企画展(内容 未定)			
松任 ふるさと館			毎月、第1日曜日 あぐら茶会	第3日曜日 星茶会	庭園ライトアップ 「七夕夜灯」	庭園ライトアップ 「月見夜灯」						
鳥越一向一揆 歴史館		常設展示			越前・越中の寺院				常設展示			

※詳細については各館までお問い合わせください

## お知らせ



白山市立鶴来博物館は、平成25年3月31日閉館します。鶴来博物館の発足は古く、旧鶴来町出身の実業家山田甚太郎氏が別荘としていた朝日城を昭和39年11月1日に寄附いただき、町立山田記念博物館としてスタートしました。昭和56年11月1日には、城郭に併設して新館を建設、町立鶴来博物館として鶴来町だけでなく白山麓を含めた歴史・文化・民俗などを企画展示等を開催し紹介してきました。これまでご来館いただいた皆様に御礼申します。また、新たに平成25年4月1日より白山市立松任博物館は鶴来博物館を統合し白山市立博物館と名称変更となります。



## 編集後記

合併後、発刊いたしております白山ミュージアムも今回で7号となりました。皆様にはご紹介させていただいた各施設に一度は足をお運びいただけましたでしょうか。毎月第3日曜日は、白山市民の方は無料で入館いただけます。この機会にぜひご来館ください。